NARO RESEARCH PRIZE 2019

省力的な栽培が可能で、大果で日持ち性に優れた多収性イチゴ品種「恋みのり」

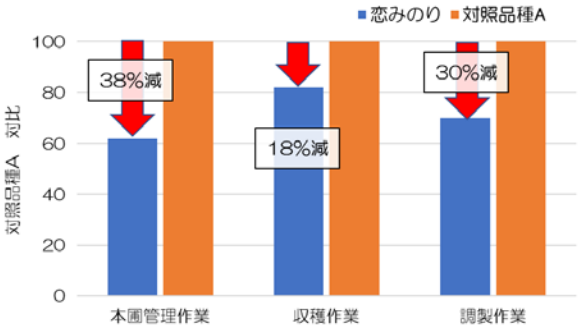
曽根一純[1)]、**遠藤（飛川）みのり**[2)]
（[1]九州沖縄農業研究センター 園芸研究領域、[2]西日本農業研究センター 畑作園芸研究領域）

研究の目的・背景等

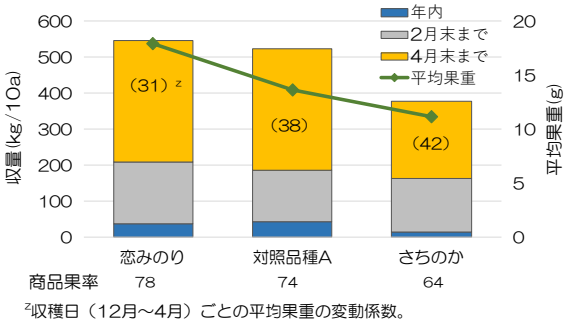
近年のイチゴ栽培では、雇用労働力を活用した1ha規模の大規模・高収益経営を目指した生産システムの構築が進められている。そこでは、栽培が容易で、連続出蕾性に優れ、収量性が高いこと、さらに日持ち性に優れ、大果で秀品率が高く、収穫・調製作業の省力化が可能な品種の育成が求められている。そこで、これらの特性を有した促成栽培用品種を育成し、普及させる。

研究の概要

「恋みのり」は、連続出蕾性に優れた大果、多収性を実現した促成栽培用品種である。果実の大きさ、揃いに関係する果房形態に着目し改良を進めた品種で、大果で果実の揃いに優れ秀品率が高いことから、収穫・調製作業が軽減でき、対照品種と比べて本圃管理作業で約4割、収穫作業で約2割、調製作業で約3割の省力化が可能である。さらに、果実硬度が高く、日持ち性に優れ、輸出適性も高い。2016年９月に品種登録出願以降、これらの優れた特性が評価され、2018年作の普及面積は熊本県および長崎県を中心に約50haとなった。2019年にはその2倍の約100haまで増加する見込みである。

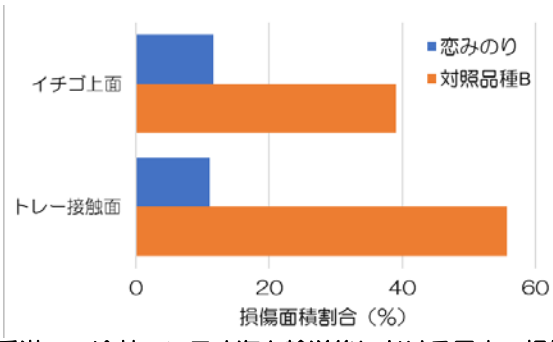


「恋みのり」の促成栽培における省力化効果
対照品種Aと比較して、高設栽培において大幅な省力化が可能。



zz収穫日（12月～4月）ごとの平均果重の変動係数。

「恋みのり」の着果状況、果実、収量性
栽培期間を通じて大果で果形がよく揃い、高い商品果率と収量性を示す。



香港への冷蔵コンテナ海上輸送後における果実の損傷面積割合

着荷時において対照品種Bと比較して、果実の損傷面積割合が1/3～1/5と少なく、日持ち性に優れる。

曽根 一純

遠藤（飛川）みのり

農研機構
NARO 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構